

「言葉の宗教」

2014年05月06日

宗教には「儀式の宗教」と「言葉の宗教」がある。イスラエル人が書き残した聖書において「儀式の宗教」を担ったのはエルサレム神殿で祭儀を司った「サドカイ派」の祭司たちであった。「言葉の宗教」は「ファリサイ派」の律法学者たちが担い続けた。紀元70年にローマ軍によって、エルサレムが滅亡した時以来、祭司たちの宗教は消滅していった。言葉に固執した律法学者たちの宗教が今日までユダヤ教を綿々と伝えている。儀式は「場と物」を必要とするが、言葉は時空を超えて伝承される。

宗教団体が巨大化すると、荘厳な寺院や伽藍を建て、きらびやかな儀式をするようになる。これは、自分たちの宗教に確信を失い、見えるところで「威勢」を張っている様とも言えよう。建築に秀でたローマ人でさえ一度は見たいと願った壮大なエルサレム神殿を、主イエスは「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石も崩されずに他の石の上に残ることはない」と崩壊を預言している。どんなに偉大に見えても「形あるものは滅する」のである。

「信仰の父」と言われるアブラハムは、紀元前19世紀頃の人と言われているが、実在した人物であろう。彼の生涯が文字や口伝によって伝承されている。驚くべきことである。旧約聖書は、バビロン捕囚と解放の時代に、大半が編集されたと言われている。それが、紀元前6世紀頃である。この時代の歴史が言葉として伝えられ、生き生きと、その実態を読み取ることができる。言葉により奇跡的に伝えられた訳である。聖書は、イスラエルの民族主義的な記述が多く、捻じ曲げられている部分もある。同時代を生きた他民族、エジプトやバビロンなどの歴史文書があれば、聖書と突き合わせて、当時の時代をもっとリアルに知ることができるであろうと思う。

他に類例を見ないほど、聖書は言葉を通して、イスラエルの信仰、歴史、文化を書き残している。言葉に命をかけた民族である。彼らは「神の言葉」によって、生きもし、死にもすると「神の言葉」への絶対的信頼に立った。それが、言葉への信頼を生み出したのである。創世記の初めに天地創造物語が書かれている。「神は言われた。『光あれ。』こうして光があった」。神の言葉は、そのまま出来事になったと受け止めている。言葉は事実になると信じたのである。言葉に命をかけた預言者たちは時代を超えて、人間と社会のあるべき真実を伝えている。主イエスは「聖なる儀式」がお嫌いであったと思う。言葉を発し、それが実現している、奇跡を現している。

今日の私たちの社会は「本音と建前」が使い分けられ、言うこととすることがバラバラである。殊に、政治家たちの言葉には全く信頼が置けなくなった。言葉に信頼が置けない社会は、積み上げていくことができない「砂上の楼閣」となる。言葉への信頼回復が互いに理解し、信頼し合って生きる関係を造りあげていく。キリスト教は「言葉の宗教」に立って、主イエスの福音を宣教し、継承していく。